願い叶える鍵

朝比奈　龍希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
願い叶える鍵

【Ｎコード】
Ｎ６１５２Ｓ

【作者名】
朝比奈　龍希

【あらすじ】
約束の丘シリーズで、海＆忍のお話。
３年生になっての学園祭をテーマに、書いた作品です。
はっちゃけた各キャラをお楽しみ下さい。

約束の丘

純白の花々の絨毯が、一面に広がっている丘で恋人同士が幸せそうに向かい合っている。
淡いアメジスト色の瞳を持つ乙女の名は、シアーナ・リュース・ティア。
時折、風が彼女の井天藍色の髪を優しく揺らす。
「シアーナ、愛している」
帯灰褐色の髪とサファイアの瞳を持つ、優しい物腰の青年の名はラリス・リュー・ティアナ。
二人とも煌びやかな装束を身に纏っていた。
シアーナはにっこりと微笑むと、照れ臭そうに告げる。
「私もよ、ラス」
「僕の愛する人は永遠に君だけだよ。好きだよ、シア」
真摯な眼差しで、ラリスが言う。
「ラス……大好き」
嬉しそうに微笑むシアーナの頬に、ラリスはそっと触れる。
永久の約束を確認するようにラリスは、静かで優しいキスをするのだった。

――――そして、悠久の時が流れ――――――――――

――――――二人はもう一度出会う。

女装命令！

白皇(はくおう)学園には、三年に一度秋に行われる中等部、高等部、大学部の合同文化祭『鳳凰(ほうおう)祭』が迫っていた。

「……多数決により３－Ａは、教室を使った女装喫茶と言う事でいいですね？」

にっこりとアクアマリンの瞳の彼が微笑む。

彼の名は、風水雷(かざみれい)。この３－Ａのクラス委員長である。

茶銀色の長い後ろ髪を縛った、物腰も穏やかな彼の後ろにある黒板には『鳳凰祭』のだしものの候補がいくつも書かれてあり、女装喫茶店に赤い大きな丸が付いていた。

「まじかよーー！」

「げげげ～～っ」

「俺ら女装すんの？」

「いやだあああ！！」

「女子は何すんだよー！」

「そうだ、そうだ！」

などなど、不満な男子生徒達に困ったような顔をする雷。

「そう言われても……」

雷も男だから皆と同じ気持ちなのだ。返答に困って、隣にいる副委員長の桜塚李也(さくらづかりや)を見遣る。

ストレートの黒髪をポニーテールにした彼女は、可憐と言うよりも綺麗と言った方がしっくりくる子である。

「それについては、あたしから言うわ」

雷はその言葉に、すっと場所を空けると李也がそこに立つ。

「あたし達女子は、心を込めて皆のエプロンドレスを作製します。学園祭当日は調理専門に回ります。と、言う訳で男子は接客をしてもらいます」

「ずるい！　俺達だって料理くらい出来るぜ！」

一人の男子が反論すると、李也はにっこりと笑顔を浮かべてあっさりとそれを却下する様に言う。
「確かに料理がプロ並な人材がいるのも判っているけど、殆どはそんなに上手じゃないでしょう？　それともあんた達は全員を唸らせるモノを作れるって言うの？」
李也の強気な言葉に、しーーんとする男子達。
「と、言うことで決定」
廊下側の列の最後尾の席で座る俺、光月海は、教壇上でにんまりと笑う李也を見て「はぁ……」と溜息を吐く。
李也に勝てる訳ねーだろが。
勝気で毒舌、変なパワーは人一倍の李也に勝つ奴なんて、１０人いないんじゃないかと思うくらいだ。
「でも、女装か……」
ぽつりと呟きながら、俺は窓際の席に居る火鷹忍に視線を移す。
少し冷たい美貌を持つ忍に、俺は一瞬見惚れてしまいそうになる。
ちょっとだけ開けられた窓から、そよ風が教室の中へと入ってきて、忍の艶やかな黒髪を揺らす。
実は彼の人は、俺の恋人だったりする。
俺達は前世からの恋人で、俺がお姫様で、あいつが王子様だった。
でも、その時は壮絶な運命の果てに引き裂かれてしまった。
そして、生まれ変わって出会って恋人同士になった。
忍の表情を眺めながら、俺はぼんやりと考える。
しかし……あいつも女装するってことか！？　なんか怖いぞ、それって……。
思わず俺は頭を抱えてしまう。でも、苦悩している筈なのに、その忍の素敵な横顔に視線が釘付けになってしまう。
どうしよう……目が離せない。
離したくない。
凄く、凄く、あいつが好き。
俺は自分の気持ちを再確認していた……。

思いはどこに？

――――――海、元気にしてるか？　私は今、アフリカで絵を描いている。
いつか言ったように、お前が高等部を卒業したらこっちで一緒に暮らさないか？
いつまでも皇さんの家で下宿と言う訳にもいかないだろう？　しかし、大学へ進むと言うならそれでも構わない。私はいつでもお前の幸せを願っているからね。
身勝手かもしれないが、この三年間一度もお前の傍に居てやれなくてすまなかった。憎まれても仕方が無いと思っている。
それでも、お前さえ良ければ一緒に暮らそう。
吉報を待っている。
父より……。
「……」
俺はベッドに寝転がり、エアメールを手に持って眺める。
一週間ほど前、久しぶりに届いた親父からの手紙。
勝手な親父……。そりゃあ、確かに卒業したら一緒に暮らしてもいいと言ったけど、今は……前と違う。
「俺、どうしたらいいのだろう……」
手紙を凝視しつつ、俺は溜め息を吐いた。
大切な者を見付けてしまったから……。
以前だったら悩まずに即答でＯＫしただろう。親父と一緒に住むのは、俺自身も望んでいた事だったし、でも。
コンコンコン。
ドアが叩かれる。
「ッ！？」
ヤバイッ！！

反射的にがばっと半身起き上がり、枕の下に手紙を隠す。
その直ぐ後、カチャとドアが開いて忍が部屋の中へ入ってくる。
「海」
「な……何？」
忍に声を掛けられ、俺はつとめていつも通りな会話をしようとするが、どこか変な感じが否めない。
忍は俺の所まで来ると、ベッドの縁に座った。
「……？」
じっ……と、見詰められて言葉に詰まってしまう。
「海、お前ここ一週間変だぞ」
ドキッ。
核心を突かれ、俺は一瞬言葉を無くす。
「……変ってなにが？」
「何って言われても、俺はお前じゃないから皆目見当がつかないだろうが」
ちょっとむっとして、忍が俺に言う。
「ごめ……」
謝ろうとした俺の頬にふわっ……と、忍の手が触れる。
ピクッ。
瞬間的に俺の身体が、強張って反応してしまう。
「海」
忍は優しい微笑みを浮かべて笑うと、俺の唇を奪っていく。
「……ん……ッ」
ぎょっとしつつも、俺はゆっくりと瞼を閉じて忍の口付けを受ける。
忍は俺の背中に手を回し、静かにベッドへ押し倒していく。
甘いキスに酔いながら、俺は忍の首筋に手を回そうとしてギクリとなる。
しまった！！　枕の下に手紙を隠していたいたんだーーーーッ！！
「海……好きだよ」

囁きと共に、キスが首筋へと移っていく。
「ッ……や……やだッ！」
思わず手で忍の胸を押し止め、抵抗してしまう。
ぎょっとして、忍が止まる。
「あっ……」
どうしよう……つい、勢いで言っちまったよぉ～～～～っ！！
「……海……そんなに嫌か？」
俺と二人だけでいる時は、他の奴が見たことが無い優しい表情をするのに……。
今は違う。
冷たい表情で、忍は俺を見下ろしている。
「ち、違う……」
そうじゃない。そうじゃなくて……ただ、今はまだ知られたくない。
心配させたくないから。
「どこが、何が違うんだよ」
冷ややかに忍が言った。
「だから……それは……」
言葉を濁す俺に、冷徹な瞳で忍は一瞥してベッドから離れる。
「勝手にしろ」
そう冷たく言い放つと、スタスタと歩き部屋から出て行ってしまう。
「あっ……」
バタン！　と、閉められたドアを俺は見詰める。
――――『お前、この一週間何か変だぞ』――――
忍の言葉が、頭の中に木霊する。
「そんなんじゃ無い……のに……」
あいつ、俺を心配してくれてたのに……。
うわあああああっ！！　俺のばかばかばか！　大馬鹿者～～～～っ！！

盛大な溜め息を吐き、俺は頭を抱えながら自分の行動を悔やむのだった。

心ここにあらず

あれから2日、忍とはすれ違いばかりで殆ど話す暇が無かった。
忍が生徒会の学園祭絡みの仕事で、帰宅は遅い。
俺はと言うと……学園祭の招待披露という形で『華琉院』の日舞を披露する筈だった人物が病気で入院してしまった為、急遽俺に白羽の矢が当たった。
その為、今、俺は光月家に来ている。
――――どう言えば、忍は納得してくれるのだろうか？
俺はそんな事を考えながら、着物を纏い、扇を手に持ち、稽古場で踊る。
――――正直に言っても、忍は怒るだろう……黙っていた事に。
「そこまでっ！！！」
ピシャリと、俺の思考を止める程の鋭い声が響いた。
「っ！！」
俺は思わずその場で固まってしまう。
声の主は、俺の叔母で日舞の師匠だった。
「海さん、今日はここまでにしましょう。心ここにあらずでは、何度やっても意味がありません」
「あ……すみません……」
本当は舞う事に集中しなければならないのに、心はずっとあいつのコトを考えてしまっていた。
返す言葉は勿論無くて、俺は俯く。
「……義兄さんの事で、悩んでいるのでしょう？」
「え！？」
親父の事を言われて、俺はバッ！　と顔を上げる。
「私達の所にも、義兄さんから手紙が届いたのよ。海さんが悩むのは無理ないわよね。まだ、進路だってはっきり決まっていないのに、

一緒に住みたいだなんて……私もビックリしてしまったわ」
そう言うと、叔母は小さく溜め息を吐いた。
「う……うん」
確かに、発端は親父のエアメールからだった。
尚更、どうしてここまで拗れてしまったのか、と思うと気が滅入る。
「海さん、余り気に病み過ぎては駄目よ。貴方の進路なのですから、自分でちゃんと選びなさい。義兄さんは義兄さんの生き方があるし、海さんは海さんの道がある。それは、忘れてはいけません」
「うん、有難う」
甘やかすのではなく、ちゃんと自分で選ぶ大切さを、叔母は教えてくれる。
――――自分の道か……。
まだ、漠然としているけれど、譲れない大切な人がいる。
そいつと離れるのは、嫌だ。
なら――――答えは……。
初めから決まっていたのかもしれない……。

告白

「忍、話がある」
カウンターテーブルで、一人遅い夕食を食べている忍に俺は声を掛けた。
「……話？」
こちらに振り向いて、不機嫌そうに忍が言った。
「ああ。ちゃんと話しておきたい事なんだ」
俺は真っ直ぐに、忍を見詰めて告げる。
すると、忍の不機嫌そうな表情が少し和らぐ。
「……」
忍は左手で自分の隣の席を指差し「ここに座れ」と、無言で言ってるの解かる。
俺は忍の隣に行き、腰を下ろした。
「……」
忍が食べ終わるまで、俺はただ黙って待った。
「――――それで？」
「えっ！？」
声を掛けられ、びくっとなって俺は顔を上げる。
ずっと俯いたままでいたから、忍が食べ終わった事にも、食器を片付けた事にも気付かなかった。
コトン……と、目の前にウーロン茶が入ったコップが置かれる。
「飲むだろ？」
「あ、うん。ありがと……」
ウーロン茶を一口飲んでから、俺は席に着いた忍を見遣る。
「……」
黙って待つ忍に、俺はポケットからエアメールを取り出した。
それを忍に突き出す。

「これは？」
「読めば判る」
「判った」
忍はそれを受け取り、中から親父からの手紙に目を走らせてゆく。
「……」
一瞬、忍の眉間に皺が寄る。しかし、直ぐに元のポーカーフェイスに戻ってしまう。
「……これが原因か……」
小さく息を吐いて、忍が呟いた。
「ごめん……」
俺がそう言うと、忍は少しだけ苦笑して。
「気付いてやれなくて、すまなかった」
ポスン……と、俺の頭に手を置き、そっと撫でてくれる。
「え！？」
思わず俺は、ぽかんとしてしまう。
忍がそんな俺に向かって、クスリと笑いを零し。
「お前は、俺とは違う。親に対して依存していても当たり前だよな。本当は、両天秤に掛けたく無かったんだろ？」
「うん……」
どっちも大切だから、どうすれば良いのか判らなくなってしまった。
でも、この恋以上に大切なものなど、他には無い。
それが、判ったからエアメールを見せようと思ったのだ。それでも、少しは不安が付き纏っていたけれど。
忍が理解してくれて……正直、ほっとした。
「……答えは出たのか？　海」
じっとこっちを見詰める忍の瞳を見返して、俺は頷いて答える。
「うん。ここに居たい」
「……そうか」
ふわりと優しく微笑して、忍が言った。

ドキッとしてしまう笑顔……に、俺は言葉を無くす。
いつ見ても、それは一向に慣れない。
それどころか、どんどん好きになってしまう。
「海」
優しい声音で俺の名を呼び、掠め取る様なキスを忍はする。
唇が触れ合うのは、ほんの少しの時間……。
それなのに、ぎゅ……っと胸を締め付けられるのは、それ以上時間……。
この刹那の時が、俺達にとってどれだけ大切か、どれだけ大事なのかを再確認させられる。
そう……この瞬間の為に、俺は……俺達は生まれ変わったのだから――――。

魂ごと愛してる

「海……」
忍のベッドで、俺達はまどろむ様に抱き合っていた。
いつもなら、きっと身体を求め合っていた。でも、今日は違った。
流石に明日の稽古の事も有るので、いつもとは違う時間を過ごす。
「変な感じ」
小さく俺は笑って、思った事を口にした。
「何がだ？」
すると、不思議そうに忍が聞き返す。
さらり……と忍は俺の髪を梳きながら、返事を待ってくれる。
「だって、こんな風に寝るのって久しぶりじゃん？」
「そうだな」
「だろ？」
クスリと、俺達は笑い合う。
俺は、忍の胸に頬を摺り寄せて瞼を閉じた。
「俺……ここに居たい。忍の傍に居たい……」
「海……」
そっと抱き締めてくれる忍に、俺は告げる。
「この先……どうなるか判らないけど、きっと沢山のものを捨てて
でも、俺はお前を選ぶ……」
「ああ」
「きっと……迷惑を掛けるかもしれない」
「大した事じゃないよ、海。ラスでいた頃に比べれば、そんな事は
大した問題じゃ無い」
「……でも」
言いよどむ俺に。
「バカだな。俺にとって、お前が生きてここに居る事が総てなんだ

ぞ？　解かっているのか？」
その言葉に、嘘偽りなど無く。
俺達は……前世で色々なものを捨て、沢山のものを失った。
愛する人の命。
自分の命。
故郷すらも……。
背負うものも、背負わなくてはいけないものも。
その苦悩の中で、それでも捨て切れない……諦め切れない『唯一の人』だった。
でも。その結末は悲しいものでしかなくて……。
――――そして、生まれ変わり……巡り逢って……。
記憶を取り戻して、もう一度、恋に落ちた。
男でも女でも、そんな事は関係無い程に……その魂ごと愛している。
「うん……解かってる」
俺は忍の衣服を掴みながら、そう答えた。
「愛してるよ、海」
落ちて来る囁きに耳を傾けながら、俺は瞼を閉じる。
「……俺も」
そう答えて、俺は忍にその身を預けた。

初恋のお姉さん

「ただいま〜〜っ」
俺は、光月家の純和風な玄関を潜った。
今日も踊りの稽古の為に、ここに来ている。
靴を脱ぎ、廊下に上がると、パタパタとこちらに歩いて来る音。
「ん？」
「お帰り、海君。元気にしてた？」
奥から出て来て、そう言うと俺にぎゅっと抱き付いて来る黒髪で色白の美人。
「か、か、香澄さんっ！！」
俺が焦って叫ぶと、勝気な瞳で不貞腐れた表情を浮かべる。
「もう！　海君ってば、あたしの事を昔みたいに呼んでくれないのね！？　酷いわ……」
「うぐっ……」
「昔は、香澄お姉ちゃんってそれはもう、海君ってば可愛かったのに」
悲しそうに言い、じと目で俺を睨む。
「うう……」
この抱き付いたままの女性は、高村香澄と言う。
叔母の弟子で、俺がシアーナの記憶を取り戻す前の……初恋の相手だったりする。
まあ、これと言って彼女と何があった訳でも無いのだけど。
彼女には、弟の様に可愛がって貰った記憶しかない。
俺も彼女を姉の様に慕っていたし、今にして思えば本当に初恋だった事も怪しいものだが。
シアーナの記憶を取り戻した時点で、それまでの価値観も何もかもがガラリと変わってしまったのだから仕方無い。
「……それで、香澄姉さんはどうして家にいるんです？」

俺は、渋々そう呼んで訊くと。
「どうしてだと思う？」
にっこりと笑って、彼女は聞き返してくる。
「んー、ＮＹのダンナと別れたとか？」
「酷～～い！　そんな事ある訳無いでしょ！！」
「ふうん、そう？」
俺は悪びれず言い返す。
「当たり前でしょ！　愛しの旦那様は、日本に出張中なの。だから、私も付いて来たのよ」
「へーへー、相変わらず仲の宜しい事で」
「うふふ、ありがとー」
香澄の旦那、高村光司は叔父の弟子の一人で、今は家業を継いで貿易商をしている。
二人は付き合って結婚したのは、家に通っていたからである。
「で、香澄姉さんは何しに来た訳？」
俺が問い掛けると、少しムッとした表情になって。
「救いの女神様に、そう言う事言うの？」
「へ？」
きょとんとする俺に彼女は、ニッコリと微笑んだ。
「お師匠様に聞いたわよ。学園祭に行う舞台の話」
「え……」
「海君が出ると、何かと不都合が発生するでしょ？」
「そりゃぁ……まあ。だけど、他に踊れる人がいないんだから……って、もしかして！」
「ええ、私が引き受ける事にしたわ」
笑顔で言う香澄は、とても楽しそうだ。
「いいの？　光司さんは何て？」
俺が驚きながらも問い掛けると。
「しっかりやっておいでって。やっぱり向こうで教えるだけだと鈍っちゃうし、あの舞台に立つ緊張感は換え難いのよね」

くすくす笑って答えて来る。
「根っからの踊り好きだね、香澄姉さんは」
「ええ、そうね。教えるのも好きだけど、人前で踊るのはもっと好き」
屈託の無い表情で言う彼女は、水を得た魚の様だ。
「ねえ、久しぶりに二人で踊りましょ！」
「え？　いいけど……」
「じゃあ、早速お師匠様に言って来るわね！」
言うが早いか、べったりとくっ付いていた俺から離れ、奥へと引っ込んで行く。
俺は小さく苦笑いをして、仕方ないなぁ……と思う。
「ホント、変わってないなぁ……」
踊り好きな彼女に、良く稽古を付けて貰った事を思い出す。
「しゃあない、今日は思い切り付き合ってやるか！」

＊＊＊＊＊＊

「ふぃ～～っ。疲れたぁ……」
俺は湯船に浸かりながら、大きく息を吐いた。
久しぶりに二人舞をして、本気で疲れたけど気分はとても良い。
「相変わらず、香澄姉さんの舞はキレイだったなぁ」
儚げなのに気品があって、どこか惹き付けられるそんな美しさだった。
「昔はあんな風になれたらいいなって思ってたっけ」
純粋にそう思っていた頃があった。男とか女とか関係無く、そうなれたら良いと思っていた。
だから、そんな彼女を好きになったのかもしれない。今は特にそんな事は思わないけど。
「ふわぁ……」
少し眠くなって欠伸をする。

「うー……ねむ……い」

重くなっていく瞼を感じながら、俺はそのまま身を任せていった

――――。

探しものはキミ

「う～～っっ。熱い～～っ」
俺は自分のベッドに突っ伏して言う。
すると、忍が呆れ顔で答えた。
「当たり前だ、バカ。風呂で寝るからだ」
そう言いながら、俺の濡れた髪をタオルで拭いてくれる。
「何か飲むか？」
「飲むーっ」
「少し待ってろ」
「うん」
頷いて答えると、上半身を俺は起こす。忍はベッドから離れて室内にある冷蔵庫を開ける。
「海、ミネラルウォーターなら残ってるぞ」
「それでいいよ」
ペットボトルを取り出して冷蔵庫の扉を閉めると、忍は俺の所に戻って来る。
「ほら」
差し出されたボトルを受け取って、俺は蓋を開けた。
「サンキュー」
ミネラルウォーターを飲み、喉を潤していく。
「ふぅ……」
一息吐いて、俺は忍を見遣った。
「？」
じっと見詰める俺を、不思議に見返す忍。
「どうした？」
「ん……あのさ……」
しどろもどろに言う俺の言葉を、忍は静かに待っている。
「忍は、ラスの記憶を取り戻す前って……好きな人居た？」

「……居たと答えて欲しいのか？」
少し不機嫌になる忍に、俺は慌てて言う。
「違うっ！　ケンカ売ってるんじゃなくて、少し気になったから……」
「？」
「実は、俺……今日さ、稽古行ったら久しぶりの人にあって……それで、俺と忍ってどう違ったのかなって思ったんだ」
「付き合っていたのか？」
「付き合っていた訳じゃ無いよ。単なる初恋の相手だっただけだし、向こうは俺を弟みたいとしか思ってなかったから。ほら、記憶を取り戻して自分の気持ちとかが、ガラッと変わった訳だろ？　まあ、最初はメチャメチャ混乱したけど……」
俺は忍の瞳を見詰めながら告げる。
すると。
「あのな、海……」
少し困った表情で、忍は俺に言葉を紡いだ。
「俺とお前じゃ、少し違うけど……それでも聞きたいか？」
「うん。聞きたい」
俺が、コクリと頷くと。
「解かった。話すよ」
「……」
「俺がラスの記憶を完全に取り戻したのは、炎の剣『焔』を継承したからだが。元々、おぼろげなラスの想いを持っていた」
「え……？」
その言葉にびっくりしたのは言うまでもない。
俺とは全然違う。
完全に記憶も、シアの感情も何も無い俺とは違う。
「俺は物心つく前から、何かを探している様な子供だった」
驚いてる俺に、忍はそのまま続けた。
「ただ、漠然とした想いだけがいつもあった。時々、その感情が嫌

になる事もあった。正直に言うと、投げ出したくなった事もある」
「え……」
「でも……夢を見る様になってから変わった。シアとの過去の夢を」
遠い記憶に思いを馳せる忍の瞳には、きっとあの頃の二人が見えているのだろう。
夢の様に幸せで、悪夢の様に悲しい過去が。
「……」
「その時に、思ったよ。ああ、俺はこの子を探しているんだと。夢の中の出来事だったけど、俺はそう確信した」
「それで、どうしたんだ？」
俺の問いに、忍はふわりと笑う。
「火鷹の力を完璧に使いこなす事から始めた。術の中には、人を探すものもあったからな。そんな中、ラスの記憶を取り戻せたのは偶然だった。大人達が『何か』を隠していたのを気付いて、俺は気になってそれを確かめようとした。シアに関する何かが見付かれば良いと思ってな。まぁ、好奇心も有ったけど。それで、焔に出会った……焔は俺の身の内に眠る力に気付いて、俺と契約した。そして、炎の剣の力でラスの記憶を取り戻した」
優しい瞳が、俺を見詰める。
忍は微笑むと、俺の頬に手を伸ばしてくる。
「……忍……」
「探して、やっと見付けた」
そっと触れる手の温かさに、俺は目を細めた。
「うん……」
俺は小さく頷く。
「その後は、お前も知っている通りだ」
くすりと笑い、忍が言う。
「俺にはシアが総てだから、誰かに渡すつもりも手放す気もない」
忍は少し意地悪な笑みを浮かべて宣言した。
「……ぅ……」

――――うわ〜〜〜〜っ。よくもまぁ、さらっとそんなコト宣言出来るよなぁ。

顔が火照るのを感じながら、俺はそう思った。

お好みはどっち？

ジリリリリリリリリッ……。
けたたましく目覚まし時計が鳴る。
「う――っっ」
俺はベッドの上で、もぞもぞと動いて毛布から手を出して時計を探す。
「ん～～？」
重たい瞼が、目を開ける事を拒む。
ペタペタペタと、頭上にいつも有る筈の時計を手探りで止め様とするが、そこには何も無い。
「んんん？」
ジリリリリリリリ……。
探してもそこには無いので、俺は無視を決め込んで毛布を頭から被る。
「……ったく、遅刻するつもりか？」
カチリと、軽い音と共に目覚ましが止まる。
「む～～っっ。誰のせいだよ！　俺は眠いの！！」
毛布に包ったまま、俺は声の主の忍に言った。
「そうか？　あれだけ、イイ思いしただろ？」
低い声で、囁く様に笑って俺に告げる忍。
「……っ！！！」
その言葉だけで、俺は昨夜の情事を思い出してしまう。
疲れて眠りたかったのに、忍は休ませてくれなかった。俺は、忍と身体を重ね合った。ほぼ一方的に襲われてたとも言うが、そんな些細な違いは忍にとって塵に等しい。
「……俺は寝たかったんだよっ！」
俺はむっとしながら、反論するが忍は楽しそうに笑いを零しながら。

「もっと……と、強請ったのは誰だっけ？」
「――ッ！！」
「なぁ、海？」
「し……忍――ッ！　てめえっっ！！」
俺は思わず、カーッと頭に血が上がり勢い良く起き上がる。
すると。
「おはよう、海」
ふわり……と、それはそれは極上な優しい微笑みが返って来て、俺は一瞬の内に呑まれてしまう。
怒鳴ってどつきたかったのに、振り上げる手すら動かない。
どうしてこうも、こいつは俺の弱い所を付いて来るのか。
優しい王子様と、鬼畜な帝王を最大限に使い分けて相手を自分のペースに引き込んでいく。
とは言え、優しい面は俺だけの特権なのは嬉しいが。
「海？」
不思議そうに覗き込んで来る、忍をじと目で睨んでから俺は言う。
「はいはい。起きるよ」
「なら、下で待ってるから来いよ」
そう忍は言うと、ぽすんと俺の頭を撫でて部屋を出て行った。
「ん～～～～っ」
俺は大きく身体を伸ばしてから、視線を時計に移した。
「……時間あるな」
まだ、7時を過ぎた所だ。
俺は寝ぼけた頭をスッキリさせる為にも、シャワーを浴びに行く事にした。

準備中です！

文化祭も2日後と間近に迫り浮き足立つ、朝のホームルーム後に李也が言った。
「今日の放課後に皆、エプロンドレスを試着して貰うから必ず教室に集まる事！　いいわね！！」
有無を言わせぬ言動に、殆どの男子はぶちぶちと文句を言うが従うしか無かった。

……そして、放課後。
男子生徒が渋い面で並ぶ。着てるのはお揃いのエプロンドレス。
黒を基本としたワンピース風の作りで、肩紐と腰紐の部分を広く長くしてリボンの様に二つを結べる工夫がされている。
制服のシャツをそのまま下に着用出来る様に、袖なしで肩の所はドレープっぽいひらひらが付いてる。
トドメとばかりにドレスの裾は、白の可愛いレースのフリル付である。
「どう？　皆、ウエストとかきつくない？　直しが有るなら言ってね」
その場を仕切る李也の声が教室に響く。
「……はぁ……」
物凄く不本意ながら、俺もそれを着用していた。
大半の男子は、ぶす～～っとした表情を浮かべているのは言うまでも無い。
極少数だけが、その面白い状況を楽しんでいた。その少数と言うのは、俺の目の前に居る翔だ。
「なぁなぁ！　海、オレ可愛い？」
ドレスの裾をヒラヒラさせながら訊いて来る翔に、俺は呆れなが

らも答えた。
「可愛いんじゃねーの？」
天真爛漫と言う言葉が似合う翔には、このげんなりしたくなる状況すら楽しくて仕方ないのだろう。
その証拠に、翔は嬉しそうににぱっと笑って雷の所に駆けて行く。
「ホントのーてんきなヤツ」
俺は小声で悪態を吐く。
「あらら、海君はそれをお気に召さないの？」
「っ！！」
背後からの声に、ぎょっとして俺は振り返った。
そこには、李也が立っている。
「お、お前っ！　何時からそこに……」
「さっきよ」
「……何か用かよ？」
にんまりと笑う李也を、俺は冷めた目で見ながら椅子にどっかりと座る。
「何よ！　その言い方！　折角、心を込めてエプロンドレスを作成した人間に言う言葉？」
「誰も頼んでねーよ！　イイ迷惑だっ」
「そう？　でもその姿、似合ってるわよ」
「男が似合ってもねぇ……」
「鬘を被ったら、どこから見ても美少女よ？」
ニヤニヤと、口の端に笑みを浮かべる李也。
「嬉しくねぇ～～」
「そうかなぁ？　どっかの誰かさんは嬉しがるんじゃないの？」
渋面の俺に李也は、意味深の微笑を向けてくる。
「……そんなのはどーでもいいけどよー。何で忍はここにいねぇんだ？」
李也とこれ以上議論しても勝ち目が無いので、さっさと話題を軌道修正する。

「だって、会長サマですもの。実行委員を統括する立場だから、こっちにかまけてる暇が有る訳無いじゃない」
ケラケラと笑う李也。
俺はそれを見て、ピンと閃くものがあった。
「……もしかして、忍と取り引きした？」
「あはっ。解かる？」
「なるほどね～～。忍がこの出し物に反対しない訳だ。そりゃーそうだよなぁ……自分が被害あわなければ、文句言う訳ないもんなー」
ずるいと思いつつも、素直に納得してしまう。
まぁ、それでも、忍の女装姿など見たくないのでホッとしていた。
「本当はね、忍にも女装をして欲しかったんだけど、ファンの子達や本人に殺されかねないもの」
李也はそう言って、ぺろっと舌を出した。
「うわっ……命知らずな」
本気でそう思っていたらしく、李也は少々残念そうだ。
「でも、何気にキレイドコロがいるから、これはこれでＯＫかなっ♪」
ぐるっと見回して、にんまりと李也は満足そうに微笑した。
「本番が楽しみだわ！」
「あっそっ」
げんなりしつつ、俺は適当に相槌を打つ。
先を思うと、何となく陰鬱になってしまうのは仕方が無い。
とはいえ、文化祭に向けて時は着々と過ぎてゆく――――――。

文化祭は楽しむものだ

――――文化祭当日。
「ふわあああああ……っ」
俺は大きな欠伸をしつつ、教室をぐるりと見渡す。
机を４つ合わせて並べ、その机に大きな赤白のチェック柄のテーブルクロスが掛けられている。
黒板側の入口部分から、窓際まで同じ柄の布が垂れ幕の様に覆われ遮断されていた。
垂れ幕の向こう側が、喫茶の厨房スペースになっている。
窓際の所に人が通り抜けられる様に、暖簾みたいに数箇所の切り込みが入っていた。
「巧く考えたなぁ」
俺は素直にそう思った。
女子が大半の企画及び、実行していたので、俺達男子は他の事を色々と出来た。
部活やクラブや同好会などに専念する者も少なくなかった。俺もその内の一人である。
今、教室には殆ど人は居ない。
調理室の方に皆が集まって、今日の準備に追われている。
まぁ、教室が使えないと言う事もあり、調理室は教室の代用も兼ねているので自然に集まる訳だけど。
それでも、皆と言っても暇を持て余した帰宅部の者達だが。
部活などの発表準備が終わっていない者達は、それぞれでてんやわんやの状況だろう。
俺ものんびり出来るのは、小一時間位でしかない。
招待された『華琉院』の控え室に行って、色々と手伝う事になっているからだ。とは言え、拘束されるのは昼頃までで、後は女装の

時間となるのだが……。
「さてと、行くか……」
俺は教室を後にした。
寄り道せず、目的地を目指して歩いていく。
お祭り騒ぎの校内を歩きながら、こういう雰囲気も悪くないよな～って思う。いつの頃からが斜に構える癖が付いていて、素直に喜んだり楽しんだり出来なくなっていた。忍、翔、雷達と出会ってからドタバタな出来事満載していたが、こうやって素直に輪の中に入って何かをやるのは新鮮だった。
少しは変われたんだろうか？と思う事もある。そして、変わっていきたいとも思う。
そんな事を考えながら、目的地へと辿り着いた。
コンコンコン。
軽めに3回ドアを叩く。
「あら、海君。来たの？」
控え室のドアが開き、出て来た彼女は開口一番にそう言った。
「来たの？　って……あのねー。香澄姉さん、俺、これでも身内なんだから手伝いくらいはするよ？」
少し憮然として言う俺に、彼女は苦笑して。
「ごめんごめん。でもね、余り手伝う事ないわよ？　思ったよりも手伝いに来てくれる人がいて、こっちがやる事が無いくらいなんですもの」
「……俺は用なしってコト？」
「そう言う訳じゃないけど、お師匠様が折角の文化祭だから楽しんで欲しいって言ってたわよ。やっぱり、心苦しいんでしょうね。身内の仕事を手伝わせてしまうのは」
「……イヤなら、手伝うのも嫌って言うから叔母さんが気にする事無いのに」
「そう言うと思った」
愚痴っぽく言う俺に、彼女はニッコリと笑った。

「え？」
「もーー、海君ってば可愛いなぁっ！」
キョトンとする俺を、むぎゅっと抱き締めて頭を撫でて来る。
「な、な、なにすんだよっ！！」
「海君のそういう所、私は好きよ」
「なに言ってんだよ！！！」
「好きだから手伝ってあげたいんでしょ？　もぅ、素直じゃないんだから……」
「べっ……別にそんなんじゃ……」
「お師匠様はね、海君の事が大切なの、好きなのよ……ご自分の子供の様に」
「っ！？」
俺は彼女の腕の中で、反射的に身体を強張らせていた。
聞きたいけど、聞きたくないその核心の部分――――。
叔母の本音……本心。
大事にされてきたけど、義理の兄の息子の俺は『本当は、もしかしたら疎まれているかもしれない。邪魔な存在かもしれない』と言う言葉が心の奥深くに無かった訳じゃない。
大切にされる毎に、心に疑問が募っていく。
それと同時に……愛されたい、好きだと言う気持ちも膨らんでいった。
だからこそ、怖くて聞けなかった。
ずっと、ずっと……。
「あのね。かなり前にね、お師匠様が海君に助けられたって言ってたわ。『海君に救われた』って……」
「え？」
「子供が自分達に授からなくて、絶望していた時に海君が来てくれて本当に救われたって……」
「そんな……はず……」
「信じなさい。皆、海君が好きなのよ。大切なの！　だから、ちゃ

んと楽しんで来なさい」
「……うん」
思わぬ事実に俺は、とても嬉しく思いながら小さく頷いた。

重い荷物は降ろしましょう

長年の肩の荷が降りた気分で、俺は『女装』喫茶で働いていた。
丁度、午後のティータイム時になり、どっとお客の入りが増えて皆忙しなく動いている。
「あっ、海君！」
「ん？」
がしっと肩を掴まれて、俺は振り返る。声を掛けたのは、李也でニコッと笑って口を開いた。
「そろそろ、交代の時間よ」
「あー、そっか。気付かなかった」
「それで、悪いんだけど生徒会室に差し入れ持って行ってくれる？」
「……なんで俺が……」
眉を寄せて嫌そうに言うと、李也は肩を竦めて。
「だって、皆嫌がるんだもの。それに、海君なら交代の時間だし、その後は好きにしていいから……ね。お・ね・が・い♪」
「……」
言外に人身御供、もしくは生贄になってね♪　と、言う意味が含まれている様に思えてならない。
「勿論、ヤダなんて言わないわよねぇ？」
李也の顔は笑っているが、目が笑っていない。
――――これは、もう、命令なんだろうなぁ……。
「……はぁ……」
がっくりと項垂れて、俺は溜め息を吐いた。
どの道、俺には選択の余地は残されてないらしい。
「行けば良いんだろ。行けば」
荒んだ気持ちを思いっきり顔に出して、俺は李也にそう答えた。
「ありがと～～。引き受けてくれると思ったわ」

ニコニコ顔で告げて来る李也は、存外にとても楽しそうだ。
まったくもって、人の不幸を面白がっているのが気に食わないが、逆らったら逆らったでまた面倒なので仕方が無い。
「んで。持って行く物はどこだよ？」
「調理室で用意させてるわ」
「んじゃ、取りに行けば良いんだな」
「うん。持って行った後は好きにして良いからね。あ、でも！　服はそのままで行ってね。宣伝にもなるし」
「げっ……マジ？」
俺は思いっきりしかめっ面で、訊き返すが。
「大マジよ！！　何か文句有るのっ！？」
李也はキッパリと断言し返した。
俺は物凄く嫌だったが、渋々承諾するしか道は無かった。

TEATIME

トレーの上には、ティーカップ、皿、ケーキの入った箱、ティーポットには保温を保つ為にティーコージーが被されていた。
「念入りな事で……」
俺はそれを一瞥して、階段を上がりながら呟く。
「……はぁ……」
そして、自然と口から出る溜め息。
――――視線が痛い。物凄く……。
チラチラと突き刺さる容赦の無い、通り過ぎる人達の視線。
時々、きゃぁきゃぁと、嬉しそうな女子の悲鳴と男子のビックリした様な凝視する視線が問答無用で俺に突き刺さる。
――――ああ、嫌だ。イヤだ。何で俺がこんな目に。
気落ちしながら俺は、足取り重く階段を上がって行く。
――――ったく。全部李也が悪いんだ。何時か復讐してやるっ！
……無理かもしれないが。
「……って、待てよ？」
ぶちぶちと心の中で文句を言ってた俺は、ふと何かに気付いた。
「まさか……でも……」
思い付いたそれを、思わず速攻打ち消したくなったが、やっぱりそれしかないと思い直した。
とても……ものすごーーーーーく不本意だが。
態々、エプロンドレスを着たままで生徒会室に行かせる事体可笑しい。
差し入れだって本来する必要の無い事だ。賄賂の一環だと思うが……。
――――本命の賄賂は、きっと『俺』だ。
この格好で差し入れをする事に意味が有るんだろう。単に忍の俺

イジメかもしれないが。
――――あいつら、絶対裏で取り引きしやがったな！　くそーーっっ。納得いかねぇっ。
「さっさと持ってって、叩き付けてやる！」
鉛の様に重い足を叱り付けて、俺は階段を上がる。
三階のフロアーは、一般客（関係者以外）の立ち入りを禁止しているので立て札代わりに、Ａ３版の紙が壁に貼り付けられ、そこに『立ち入り禁止』とデカデカと書かれている。
俺はヤケクソ気味に、階段を上がって生徒会室のドアまで行った。
「……」
両手がトレーで塞がっているし、少しというかかなり頭にもきていたので、足でドアをガンガン蹴り付けてやった。
「開けろーーっ！」
少しの間が有って、ガラッとドアが開かれた。
「海、待っていたよ」
意地の悪い笑みで、出て来た忍は俺に告げた。
「……これ、李也からの差し入れ」
トレーをずいっと忍に出して言う。
「どうした？　中に入らないのか？」
入口で止まっている俺を、怪訝そうに忍は見詰める。
「いや、俺、差し入れ持って来ただけだし、それに早く着替えたいし……」
実を言うと、イヤな予感がしてならない。
入ったらろくな目に遭うかもしれないからだ。
「今、役員は一階の実行委員会本部に行ってるから、ここには俺しかいないから気にする必要はないぞ？」
「……」
――――それが一番嫌なんだつーーの！！
俺はじと目で忍を睨み付ける。
「そんなに信用ないのかねぇ……」

愚痴る様に言うが、忍は楽しげに笑っていた。
「俺は信用出来ないね」
すっぱりきっぱり、俺は言い放つ。
「まぁ、どちらでも一向に構わないけどな。信用が有ろうが無かろうが」
そう言って、忍はニヤリと笑う。
「……」
すっ……と、忍が俺の耳元に唇を寄せて囁く様にこっそりと言って来る。
「だが、お前は俺が好きだろう？」
「ばっ！　な、な、何言ってやがんだっ！！」
ククク……と、笑いを零しながら忍は俺を見る。
俺は慌てて周囲を見回して、誰も居ない事にホッとした。
遊ばれていると解かってるのに、心臓がバクバクとなってしまう。
――――うぅ……心臓に悪い……。
「……で？　どうするんだ？」
「え！？　あっ！」
忍が俺に問い掛けながら、ひょいっと俺からトレーを奪って近くの長机の上に置く。
「一応、海の分も有るけど？」
「俺の分？」
「二人分以上のケーキを入れておくと、李也は言っていたからな。この後、予定が有るなら引き止めはしない」
「……」
「どうする？」
入口に突っ立ったままの俺に訊いて来る。
「……別に、予定なんか……ない」
「なら、食べていくか？」
「……うん」
意地悪な表情ではなく、あくまで優しく紳士的に問い掛けて来た

ので嫌とは言えず……頷いてた。

贈呈品は美味しくイタダキマス

ドアを閉めて、忍は俺の目の前に立つ。
「……？」
「結構、似合ってるな。ソレ」
まじまじと俺を見詰め、忍はそう感想を述べた。
「！！」
カチンとなる俺に。
「不服そうだな……」
平然と忍は言ってのける。
「当たり前だ！　誰が好き好んでこんなモン着たがるかよっ！」
「ほーぅ」
「何だよ、その目はっ！」
意味深な眼差しと小馬鹿にした態度で見詰められて、俺は益々ムカつく。
「忍だってこれ着たら、意外と似合うんじゃねーのー？」
厭味で俺はそう言ったが、忍は平然としている。
「……似合ってＦＡＮが増えたら、困るのはお前かもな。海」
「うぐっ……」
言い返してやりたいのに、言葉が喉に引っ掛かって出て来ない。
そうでなくても、恋敵はあちらこちらにそれはもう……沢山居る。
俺自身、何回か告白現場を目撃した事がある。
初めの時は、シアの記憶が無かったから「へぇーー」って感じで見てたが……。
今でもその場面に遭遇すると、とてもじゃないがハラハラしまくってしまう。
自分だけを選んでくれるのは嬉しい。でも、同時にフラれてしまう女の子達……そんな彼女達を見てしまうと、やっぱり心が痛む。

好きな気持ちを止められない、そんな想いを知ってるから。
彼女達の傷付いた心が、痛いくらいに理解出来てしまう。
「ずりぃ……そう言われたら、俺……何にも言えねぇじゃん」
「そうか？」
「そうだよ！」
忍はふわ……っと微笑んで、手を伸ばして俺の頬に触れて来る。
ぶすっとしたままの顔でいると。
「そんな顔するな。折角、可愛いのに台無しだぞ」
クスクス笑って、忍はちゅ……と俺の頬に軽いキスをする。
「っ！？」
ぎょっとする俺に、優しいキスを幾つも落として来る。
頬から、唇へと――――。
「ん……っ……」
誰かが来たらヤバイのに、俺はそれを拒めなかった。
それどころか、忍の背中に手を伸ばしてしまっていた。
「好きだよ、海」
「うん……」
キスから解き放たれて、告げられる言葉。
嬉しいのと同時に、自分の存在理由を確認させられる。
誰かに譲れない想い。
誰よりも勝るこの気持ち。
誰かが泣くのは、もう仕方の無い事で。
何処かで理解していても、いつもいつも納得出来なくて嫌だった。
素敵な存在なら、尚更……誰だって好きになってしまう。
当たり前の事……。
凄く凄く自然な事……。
「俺って……心が狭いよなぁ……」
俺が溜め息を小さく吐いてぼやくと、忍は笑って言った。
「そうか？　どっちかって言うと、お前より俺の方が狭いぞ？」
「え？」

「そう……何所かに閉じ込めてしまいたくなるくらいにはな」
冗談と思えない声音で言うものだから、俺はマジで引き気味になる。
――――こっ……怖いってーーーーっ！
「冗談だよ」
にっこり笑って忍は言うが。
「冗談に見えねぇんだよ！　忍の場合！」
「そう？」
「そーだよっ！」
しれっとして言う忍に、俺は怒鳴って反論する。
「……それじゃぁ……」
「え？　……うわっ！？」
忍は何か考える仕草をしたかと思うと、俺を抱き上げる。
俗に言う、お姫様抱っこだ。
「なななななななにしてんだっ！！！！」
焦りまくる俺に、忍はにーっこりと微笑する。
「監禁」
「――――っ！！」
俺は声にならない悲鳴を上げた。
固まる俺を抱きかかえて、忍は会長室のドアを潜る。
忍はソファーに俺を横たわらせて、それはもう楽しそうに笑う。
極悪で、麗しい微笑で。
――――ぎゃあああああああああ！　いやだ～～～～～～っ！！
とても嫌なのに、その笑みに釘付けになる。
凄く惹かれてしまうのは、忍が好きだから。恐い物見たさも少しは有るかもしれないけど、惹かれてしまう比重は大きい。
結局の所、惚れた弱みという感じで完敗だ。
「……忍……」
俺はそっと手を伸ばして、忍の頬に触れた。
優しく目を細めて笑みを浮かべる忍に、俺はドキッとなる。

「海……」
名を呼ばれ、俺はゆっくり瞼を閉じた。
そして。
啄ばむ様な口付けが落ちて来る。
俺が忍の首筋に手を回す頃には、何時しか口付けは深く求め合う様に変化していた。
「ん……ふっ……」
一頻りキスを愉しんだ後、忍が口を開いた。
「本当は一緒に回ってやりたい所だが、俺はここを殆ど離れられない」
「ほえ？」
俺は間抜けた声を出して、忍をじっと見詰めてしまう。
「……お前なぁ……」
「あ、えっ？　ええっ？　もしかして、気にしてた！？」
「ったく、シアならきっと、お祭りを楽しむだろうと思って気を遣えば……」
呆れた表情で喋る忍に、俺は思わずバツの悪い気分になる。
確かに忍の言う事は本当で。
シアーナなら、お祭り事はとても楽しみにして当日ともなれば、大はしゃぎで色々見回っていた事だろう。
自分の隣にラスこと、ラリスが居れば楽しみは倍増する。
「まぁ……俺はシアと同じ様に、お前の隣で素直に喜んでいられる程おめでたくねーよ」
「海がそう思っているなら、それはそれで構わないけどな」
忍がふっ……と、小さく笑いを零す。
「今更、男同士で仲良く並んで歩いて、敵を作りたいと思わないし……それに……」
――――きっと、その時の気持ちが顔に出ちまうだろうし……。
そんなこっぱずかしい事に思い当たってしまったら、今更どの面下げて「一緒に回らねぇ？」なんて言える筈が無い。

「こら」
むーんと、考えを巡らず俺に忍が軽くキスをした。
「眉間に皺寄せてまで、考え込む事か？」
ふわりと微笑んで、俺の目を奪う。
人前ではそんな甘い笑みなど一つも浮かべず、何時でも澄ました容相でいるのに……。
こんなに破顔している忍と二人で歩いていたら、一体何人卒倒する事やら……考えただけでも恐ろしい。
「……こんな顔、他の奴に見せんなよ」
忍の頬に触れて、俺は感じた事を言葉にした。
目を細めてにっこりと笑い、忍は嬉しそうな表情を見せる。
「見せないよ。君が望むならね」
「……ラスみたい」
ぼそりと呟いて感想を吐く俺に、忍は「おや？」と言う顔付きをして。
「お気に召さなかったかな？」
そう言った割には、その表情は思いの外自信有り気だ。
「解かってる癖に……」
照れてそっぽを向いて、俺は吐き捨てる。
優しい、優しい王子様。
ラリスは誰にでも分け隔て無く、優しく接する聡明な人格者だった。
そんな優しいトコロも大好きで、自分に「好きだ」と告げてくれるそんな時は、心ごと包まれる様な気さえする程惚れていた。
――――「私、ラスの笑顔が大好きよ」――――
無邪気にそう言っていた、もう一人の自分……シアーナの言葉を忍が憶えていない何て事は絶対に無い。
「解かっているよ。でも、海の口から直接聞きたい」
「……好きだよっ。悪いかっ！」
俺は目を瞑り、ヤケクソ気味に言い放つ。

シアーナだった頃は、素直に面と向かって「好き」と言えたのに……今の俺はとても素直ではない。
男として生まれたプライドか、はたまた捻くれた性格が災いしてる為か、純粋な気持ちを晒け出す事が躊躇われてしまう。
「まったく……素直じゃないんだから、お前は」
クスクスと笑い声を上げて忍は言った。
「……どーせ俺は、捻くれ者だよっ」
「まぁ。そんなトコロも好きなんだけどね」
優しい声音で告白すると、忍は俺の頬を両手で包む。
そして、くいっと顔を正面にさせられ、反射的に目を開けると穏やかな瞳が俺を捕らえて離さない。
「……」
「海。好きだよ」
「うん……」
「俺の事が好きか？」
「……うん」
真摯な眼差しと声に、俺は頷いて答えた。
忍の笑顔がゆっくりと近付いて……。
俺は瞼を閉じて、忍の口付けを受け入れていった……。

未来への扉

結局、あのほんわかなムードは長く続かなかった。
雷と翔とティアが乱入した上、俺を拉致して校内を引き摺り回した。一番大はしゃぎしていたのは翔とティアだった。
期間限定で『人間界』にいる妹、ティアの嬉しそうな姿を見れたのは満足だった。
忍と一緒に回れなかったけれど、翔達と一緒に回れて良かったと今はそう思っている。
「……何を思い出して笑ってるんだ？」
「えっ！？」
俺は降って来た声に、はっとなって顔を上げた。
パジャマを着てから俺はベッドにうつ伏せに寝転がり、便箋を広げて文化祭の事とかも書いて親父に送ろう考え、ペンを持ったままで先日の文化祭の事を思い出していた。
どうやら、知らず知らずの内に思い出し笑いをしていた様だ。
「顔に出てた？」
パジャマ姿で側に立つ、忍に俺は問う。
「ああ。思いっきりな」
忍は呆れた様な、でも優しい瞳で俺を見ていた。
「……まぁ、いいか。どーせ見るのは、お前しかいねーんだし」
くすりと笑って俺が言うと、忍は相槌を打つ。
「そうだな。で、お前は何をしていたんだ？」
「見れば解かるだろ？　手紙を書こうとしてたんだよ」
散乱……と言うより、出してそのまま放置の便箋。
しかも、まっさらな便箋が目の前に有る。
「父親にか？」
忍の問いに答えつつ、持っていたペンと便箋の下敷き代わりに使

っていた本をベッドの隅に置く。
「うん。まぁね……」
俺はごろんと身体を反転させて天井を見上げる。いざ書くとなると、何から書き始めて良いのか悩んでしまう。
予期せずして発覚した叔母の真意を伝えたかった。
親父自身もきっと、負い目があるだろうから。息子を預けたままでいる自分を責めてしまう事が、一度ならずもあっただろうから。
そして、本題の『一緒に住めない』をどう切り出して良いものか、悩んだまま現実逃避の物思いに耽ってしまった。
「うーん……いざ書こうとすると、手が止まっちまうんだよなぁ」
俺は溜め息を吐きつつぼやく。
「海の書きたい様に書けば良いだろう？」
やんわり……と、忍の指が俺の髪に触れゆっくりと頭を撫でてくれる。
顔を横に傾けると、温厚な微笑みが飛び込む。
「書きたい様にかぁ……」
「でもまぁ。お前の場合、声に出して言う方が海にとっては難しいだろ？」
「うぐっ……」
大当たりだ。正面切って言うのが苦手で、しかも捻くれ者とくれば後は手紙やメールなどの手段しかない。
「せめて、手紙だけでも素直な気持ちで書いたらどうだ？」
「そんなコト、解かってるよっ！」
言われなくても重々承知している。
「まぁ、俺よりは納得しやすいんじゃないのか？　勝手に許婚とかを宛がわれていないんだろう？」
嫌味に聞こえる言葉遣いで、忍は俺に問い掛けてくる。
「どーせ、俺には許婚なんかいねーよ！」
むすーっとした表情で、忍に文句を言うと。
「居たらあらゆる手を使って、ぶち壊してやろう」

にっこりと微笑して、忍は怖い事をさらっと言い退ける。
「穏やかな笑みを浮かべて言うな！　こえーだろーがっっ！！」
俺は上半身を起こして叫ぶ。
「そうか？」
「そーだよ！　それにそんな話が出てもちゃんと断るから……」
「ほー。本当だな？」
忍がニヤリと笑いながら、俺のベッドの上に登って来る。
ギシッ……。
ベッドが軋む。
俺はギクリとなって身体を後退させるが、忍にガッと手首を掴まれる。
「あっ！！」
「逃がさないよ」
低音で宣言されてしまい、俺は一瞬固まった。
その隙を見逃す忍ではない。
掴んだ手首を己の所に引き寄せ、俺を包む様に抱き締めた。
「海。愛している」
低く優しい声音が降って来る。
俺は顔を埋めたまま、その言葉を聞いていた。
「俺の傍にいろ。いいな？」
命令口調の物言いだったが、言葉は俺の胸に甘く、優しく突き刺さる。
それは、何にかえても欲しい言葉。
古よりの約束。
二人だけの誓い。
「うん……」
俺は顔を上げ、瞳に忍を映す。
「海……」
「……忍」
名を呼び合い、どちらからとも無く瞼を閉じて甘い口付けを交わ

す。
俺の背に忍の腕が回ると、静かにシーツの上に倒される。
「海」
忍はそっと俺の頬に触れた。
「ぁ……」
小さく声を出す俺の唇を吸い取る様に、キスが落ちて来た。
俺は腕を忍の首筋に回して、温もりを確かめながら無言でキスを強請る。
「好きだよ」
忍の優しい声に酔いながら、俺は忍に身体を委ねていった……。

君は傲慢な約束で　俺を捕らえる
その腕に　抱いて
古き誓いを違えぬと　君は言う
何よりも　欲しいのは　唯一人
狂おしい程の嫉妬も　胸の痛みも
キスを重ねる度に和らぐ
心が満たされていく

だから　誓おう
もう　離れないと
――――離さないと――――

誰かを敵に回しても　願いを叶える為に
鍵を手にし　俺は未来への扉を開く

君だけの為に……

END☆彡

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6152s/

願い叶える鍵

2011年4月28日21時26分発行